

米軍資料にみる姫路空襲

佐々木 和子

一 はじめに

姫路市街地の西南、手柄山に高さ約二七メートルの「太平洋戦全国戦災都市空爆死歿者慰霊塔」が聳えている。一九五六年（昭和三二）一〇月に平和の願いをこめて建てられたもので、塔の台座には、戦災都市の一つ一つがマークされた日本列島がレリーフされ、「太平洋戦争全国戦災都市空爆死歿者の霊此ところに眠る」と記されている。塔の左右には一都九九市一三町の都市名、被爆年月日、犠牲者数が刻まれた側柱が並んでいる。太平洋戦争末期、一九四四年（昭和一九）一月から、一九四五年（昭和二〇）八月一五日の無条件降伏の日まで、日本本土は連日のようにマリアナ基地から飛来するB29により爆撃を受け、各地で何百万という市民が災熱地獄にたたきこまれた。

姫路もまた、何度かアメリカ軍による空襲を受けた都市である。なかでも、六月二日川西航空機姫路工場を中心とする昼間爆撃攻撃と、七月三日深夜から四日未明にかけての全市街地焼夷弾爆撃による二回の大空襲で、姫路市はほとんど壊滅した。

この七月三日～四日の姫路空襲は、六月一七日から八月一四日にかけて第二二爆撃機軍団（マリアナ基地のB29部隊）によりおこなわれた「中小都市工業地区に対する焼夷弾攻撃」の一環である。これは、東京、名古屋、大阪、神戸および横浜という「大都市工業地区に対する焼夷弾攻撃」^①作戦が、六月一五日第四次大阪大空襲により完了した後、続いておこなわれた。これにより、「五二都市が全面的に破壊され、さらに六都市が部分的に破壊された」^②のである。

このように激烈をきわめた空襲について実態や被害状況を明らかにしておくことは、講和条約発効後生れた私達が親と

して子供を育てている現在、非常に必要かつ大切なことである。近年、市民が自分達の手で実態を記録しようという運動が各地でおこり、さまざまな形で体験記が刊行された。一方、日本、アメリカ双方の公式記録をはじめとする諸資料による実態解明もすすんでいる。大阪では、大阪空襲研究会訳・編集になる『大阪大空襲に関するアメリカ軍資料』（一九八五年三月）が刊行され、神戸では、二月四日の神戸空襲について、『歴史と神戸』第一三五号（一九八六年四月）で「米軍資料による二・四神戸空襲」が渡辺美生氏により執筆され、三月一七日と六月五日の神戸大空襲については、神戸市史紀要『神戸の歴史』第一三号（一九八五年一月）で「神戸空襲に関するアメリカ軍資料、戦術作戦任務報告」として、高橋利明氏により米軍資料が翻訳、解説されている。姫路では、一九七三年（昭和四八）六月に姫路空襲を語りつぐ会により『姫路空襲の記録―恐怖の昼と夜』が刊行された。そこで本稿は、七月三日深夜から四日未明にかけての姫路空襲に関する第二一爆撃機軍団司令部作成の「戦術作戦任務報告」(Tactical Mission Report)の内容を紹介する。このことよって姫路空襲の実態把握に少しでも役立てば幸いである。資料の所在はワシントンの国立公文書館であり、大阪府平和祈念戦争資料室が入手したマイクロフィルムを利用した。本稿作成にあたり、多くの助言と指導を頂いた関西大学教授小山仁示氏と種々便

宜をはかって下さった大阪府平和祈念戦争資料室に感謝する。なお、原文ではグリニッジ時間またはマリアナ時間が使われているが、本稿ではすべて日本時間に直していることをこゝとわつておく。

二 姫路爆撃命令

戦術作戦任務報告というのは、第二一爆撃機軍団司令官カ―チス・E・ルメイ少将がワシントンの第二〇航空軍司令官H・H・アーノルド大将に提出したものである。姫路空襲は、「一九四五年七月三日―四日の高松、高知、姫路、徳島に対する焼夷弾攻撃報告」のなかに含まれている。この「戦術作戦任務報告」は、地図、写真、図表をあわせて全文六五頁から成り、本文にあたる戦術説明が一〇頁を占め、付録部分は作戦、天候、通信、情報、総合統計概要、第二一爆撃機軍団作戦命令、配布先の七部門で構成されている。

報告書の冒頭には、「一九四五年七月三日付、第二一爆撃機軍団司令部戦闘命令 (Field Order) 第九五号は、第五八、七三、三一三、三一四の各爆撃航空団 (Bombardment Wings) に対し、作戦任務 (Mission) 二四七号―二五〇号のとおり、高松、高知、姫路、徳島への焼夷弾攻撃をするよう指令した」とある。そして、指定された目標として、作戦任務第二四七

号は第五八航空団が高松都市地域、作戦任務第二四八号は第三三航空団が高知都市地域、作戦任務第二四九号は第三一三航空団が姫路都市地域、作戦任務第二五〇号は第三一四航空団が徳島都市地域と記されている。

当時、マリアナ基地のB29部隊は、第五八航空団がテナアン西飛行場を、第七三航空団がアイズレイ（アスリート）飛行場を、第三一三航空団がテナアン北飛行場を、第三一四航空団がグアム北飛行場を、第三一五航空団がグアム北西飛行場を基地としていた。姫路空襲の命令を受けた第三一三航空団は、一九四五年二月四日の神戸空襲から本土土爆撃に加わった部隊である。

一九四四年一〇月一二日に一番機が到着したマリアナ基地のB29は、一〇月末には五九機だったのが、一カ月平均百機以上の割合で増加し、戦争末期の四五年七月末には九八五機という驚くべき増強ぶりを示した。六月一七日から八月一五日未明まで、中小都市に対する延べ八〇一四機の出撃、五万四一八四トンの焼夷弾攻撃がこれらの基地からおこなわれたのである。

七月三日午前四時、姫路を含む四都市地域への夜間爆撃命令すなわち作戦命令九五号が、第二一爆撃機軍団司令官ルメイから各航空団に対し出された。第三一三航空団に対しては三箇群（グループ）で姫路都市地域を攻撃するよう命じていた。

発進は三日午後四時三〇分、搭載弾は一箇群がM47焼夷弾、二箇群がM69焼夷弾の集束弾、攻撃高度は一万フィート（約三〇〇メートル）、から一万八〇〇フィート（約三三〇メートル）、M47焼夷弾と、最良のリーダー要員を乗せた一二機の先導機に導かれた主力部隊によるものとした。攻撃は、この一二機が、まずM47焼夷弾を投下したうえ、目標上空で七十秒以内に集中して攻撃するよう指示している。また、爆撃投下後直ちに、最低一万二〇〇フィート（約三七〇メートル）まで上昇することを命じた。

作戦命令九五号は、姫路のはかに高松、高知、徳島への攻撃を命じたものであるが、これとは別に、同じ七月三日～四日、第三一三航空団による下関海峡、船川、舞鶴、酒井湾への機雷投下作戦が命令された。これらの作戦と相前後して、中小都市への焼夷弾攻撃は、隔日または二日おきに数都市ずつ、さらに軍事産業施設への爆撃と港湾への機雷投下がくりかえされていた。七月三日～四日空襲の前には、一日～二日に呉、熊本、宇部、下関の各都市地域への焼夷弾攻撃、下関海峡、七尾湾、伏木湾への機雷投下作戦が実施された。続いて二日夜には、和歌山県下津の丸善石油を目標に爆撃がおこなわれていた。さらに姫路空襲の三日後、六日～七日に千葉、明石、清水、甲府の各都市地域と、二日と同じ丸善石油を目標にした爆撃が続いておこなわれていく。このように、日本

本土各地は連日連夜B 29による大量攻撃の恐怖にさらされてきたのである。

三 姫路都市地域への攻撃

姫路空襲に関する「戦術作戦任務報告」は、目標である姫路市の重要性について、次のように述べている。

姫路は、長さ約二マイル、幅約一・五マイルの人口一〇万四〇〇〇人の都市である。姫路は、山陽本線（神戸—下関間の主要幹線）、広畑、飾磨への支線、日本海側への支線の重要な鉄道ターミナルである。姫路は重要な軍事的中心地であり、二カ所にかなり大きいミリタリーゾーンがある。また、川西航空機の組立工場がある。

この記述から、姫路を鉄道の重要拠点および軍事的中心地とみていることがわかる。大きな軍事産業施設として川西飛行機組立工場があるが、これはすでに六月二二日、第五八航空団による昼間爆弾攻撃で大打撃をうけていた。

これらの目標地域への投下弾についての記述は、次のとおりである。

すべての航空機は、搭載量一〇〇%の焼夷弾、焼夷集束弾を搭載することとされた。

第三一三航空団の一箇群は、M 47 A 2 焼夷弾を搭載し、

二箇群はM 69弾を内蔵する集束弾を搭載することとされた。

この搭載弾は、「高度に建物が密集し、人口が稠密で燃えやすい都市」なので、「M 47 A 2 弾と、E 46 集束弾を組み合わせた焼夷弾攻撃」が有効であろうと考えられた結果であった。

また、信管装置については、「すべての集束弾は、目標上空五〇〇〇フィート（約一五〇〇メートル）で解束する信管を付すこととされ」、「M 47 A 2 弾は、弾頭に瞬発信管を付すこととされた」と記されている。投下間隔管制装置は、「M 47 弾については一〇〇フィート（約三〇メートル）E 46 集束弾は五〇フィート（約一五メートル）にセットされた」のである。そして、これら「焼夷弾の搭載、信管の装置および投下間隔管制装置は、集束弾が解束するのに最適の高度、目標への適切な投弾密度」を考慮して各都市ごとに選ばれた。

この姫路空襲で使用されたM 47 A 2 弾というのは、一〇〇ポンド（四五キロ）の炸裂型膠化ガソリン焼夷弾であり、M 69 は六ポンド（二・七キロ）の尾部噴射、油脂焼夷弾である。またE 46 集束弾というのは、M 69 を内蔵したものである。M 47 は、M 69 よりもはるかに大型であり、投下されると建物の屋根を突き抜け爆発して即座に大きな火災を起こし、日本側の消火体制を混乱におちいらせることができた。また、この火

災が後続機に各目標点を示すのに効果的であったので、B 29の日本本土空襲の際には、必ずといってよいほど先導機はこのM 47を投下した。「戦術作戦任務報告」でも「M 47 A 2弾を搭載した飛行機は、目標に印をつけるため最初に投弾するものとされた」と記している。先導機がM 47を投下したあと、(後続の主力部隊はほとんど六ポンド(二・七キロ)のM 69尾部噴射、油脂焼夷弾の集束弾を使用した。七月三日～四日空襲においても、四都市に対する各一二機の先導機は各々M 47の搭載を命ぜられ、高松、高知、姫路に対してはM 69が使われている。M 47で日本側を混乱に追いこんだあと、小型のM 69を大量に投下し、目標地域に大火災を誘発する作戦であった。M 69は一九四二年、燃えやすい家屋が密集した日本本土の都市攻撃用としてアメリカ軍が開発した兵器である。細長い六角形の金属筒で、直径八センチ、長さ五〇センチ、弾頭にナパーム剤というゼリー状油脂の充填した薬室があり、弾尾には長い麻布製のリボンがついていた。このM 69を一六発ずつ三本の束として、つまり四八発を内蔵して一個の大型焼夷弾(五〇〇ポンドの集束焼夷弾、E 28、E 46など)として、B 29に搭載されたという。集束焼夷弾は、空中で時限信管により破裂して、四八発のM 69弾に分解する。この時弾尾のリボンに火がつくので、空中に火の雨が降るように見えたのである。七月三日～四日空襲においては、これら集束焼夷弾は、目標上

空五〇〇〇フィート(約一五〇〇メートル)で解束するように信管をつけるよう指示されていた。つまり、一五〇〇メートル上空から、三〇メートルおきに四八発にわかれたM 69弾が降りそそぐように信管がつけられたのである。

「戦術作戦任務報告」によると、姫路空襲の場合の第三一三航空団の一機の搭載可能限度量は、一万六〇〇〇ポンド(七二〇〇キロ)、平均は一万五〇〇〇ポンド(六七五〇キロ)と予想されていた。当日、姫路を爆撃したのは一〇六機であった。この一〇六機が合計七六七・一トンの焼夷弾を投下したと報告されているから、実際には一機あたり約七二四〇キロを積んでいたという計算になり、可能限度量以上搭載されたことになる。アメリカ軍は、姫路を一・九二平方マイル(約四九七ヘクタール)の広さと計算していたから、一〇〇メートル四方(一ヘクタール)あたり約一五四〇キロの爆弾が降りそそいだわけである。

四 攻撃成果と日本軍の抗戦

姫路空襲のために発進したのは、第三一三航空団先導機一二機、主力部隊九五機、あわせて一〇七機である。一番機がテニアン基地を飛び立ったのは、ほぼ作戦命令どおり三日午後四時二三分、最終機は午後五時四九分であった。

テナアン島の基地を発進した第三一三航空団の一〇七機は、硫黄島上空を経て、北西進し、徳島県網代崎東方海上の大島（北緯三三度三八分東経一三四度二九分）を陸地確認点（Landfall）とし、四国上空を北西進し、香川県馬が鼻（北緯三四度二一分東経一三四度一五分）を進入点（Initial point）として北東の方向にある姫路市の上空に侵入してきた。片道約二四〇〇キロにおよぶ航程であった。

陸地確認点である大島に到達したのは、一番機が三日午後一時二六分、最終機が四日午前一時二分、目標上空高度一万二〇〇フィート（約三二〇メートル）から一万一五〇〇フィート（約三五〇メートル）から、投弾したのは三日午後一時五〇分から四日午前一時二九分にかけてであった。発進したのは先導機一二機、主力部隊九五機であったが一機は整備不良のため戦線を離脱し、実際に爆撃に参加したのは一〇六機であった。

爆撃後のB 29は目標上空で左旋回し、明石、神戸の防衛陣地を避けて脱去し、テナアン基地に帰投したのは、四日午前六時五分から七時三十分にかけて、往復一三時間半に及ぶ長距離爆撃行であった。

こうして実施された姫路空襲の戦果について、「戦術作戦任務報告」では、姫路市の一・二一六平方マイル（約三二五ヘクタール、市街地の約六三・三パーセント）に損害を与え、六

月二二日に与えたのとあわせ、一・四七六平方マイル（約三八二ヘクタール、全市街地一・九二平方マイルの七六・七パーセント）^⑧にダメージを与えたと報告している。その内訳は、都市市街地域（Urban built up area）の損害は、一・一二九平方マイル（約二九二ヘクタール）、工場地域の損害（Industrial Damages）は〇・三四七平方マイル（約九〇ヘクタール）となっている。都市市街地域とは、姫路城をとり囲んだ住宅・商業地区であり、姫路城の南部に東西に伸びた地域である。また、被災地域は市街地の南部、東部に集中しており、北部、南部ではほとんど見られない。ここで注目すべきことは、都市市街地域をわざわざ、住宅・商業地区とことわり、その損害に言及している点である。この空襲が一般民家を焼き払い、非戦闘員である一般市民を炎熱地獄におとしられる無差別爆撃であったことが、このことから明らかである。

同夜の他都市への攻撃成果は次のとおりである。高松へは発進機一三〇機（空海救助機二機を含む）、爆撃機一一六機、四日午前二時五六分から四時四二分にかけて八三三・一トンを投下、一・四平方マイル（約三六二ヘクタール、市街地の七八パーセント）を破壊。高知へは発進機一三一機（空海救助機二機を含む）、爆撃機一二五機、四日午前一時五二分から二時五二分にかけて一〇六〇・八トンを投下、〇・九二平方マイル（約二三八ヘクタール、人口密集地域の四八パーセント）を破壊。

徳島へは発進戦一三七機、爆撃機一二九機、四日午前一時二
四分から三時一九分にかけて一〇五〇・八トンを投下、一・
七平方マイル（約四四〇ヘクタール、市街地の七四パーセント）
を破壊。このようにみると、姫路の場合、四都市中一番少な
い爆撃投下量で、他都市と同程度の破壊をこうむったことが
わかる。日本側の資料である兵庫県土木部計画課発行の『復
興誌』によると、二回の大空襲で、「罹災面積八七七、〇〇
〇坪（約一九〇ヘクタール）、罹災者五七、四六六人、死者五
一九人、傷者五一六人」の被害をうけたとしている。

この空襲に対する日本側の反撃はどのようであったのだら
うか。第二二爆撃機軍団は、敵の戦闘機の反撃は、「およそ
二〇から二五機の迎撃機が、ごく僅かな反撃を試みると思わ
れた」と推測している。

敵の対空砲火については、すべての作戦任務での攻撃高度
が一万フィート（約三〇〇〇メートル）に指定されたのは、高
射砲を考慮した結果であると述べている。姫路については、
「二三の重砲、二四の中口径砲、五機の照空燈」に守られて
はいるが、「ほとんど効果がない」防衛体制と考えていた。

そして実際の反撃は次のようであった。「敵の戦闘機の反
撃」について「高松―高知―姫路―徳島の夜間爆撃で、たつ
た二〇機の迎撃機と遭遇した」だけで、「日本機が八回攻撃
し」、「B 29 一機が敵の戦闘機と高射砲の連携によって損害を

受けた」と記している。

「対空砲火」については、「目標への途中、家島群島（西島
家島、男鹿島、坊勢島）で貧弱で不正確な中口径砲と重砲の高
射砲に遭遇」し、「目標上空での高射砲は、貧弱で不正確な
中口径砲と重砲、ほとんどが中口径砲」と記している。その
結果、「この作戦任務では一機も失なわず、一〇六機中一機
だけが高射砲で損害をこうむった」のである。要するに日本
軍の反撃は、全くといってよい程効果がなかった。

なお、この日の全作戦任務においてB 29 三機が失われ、四
機が破損した。しかし、失われた三機は共に、日本軍側の反
撃によるものではなかった。アメリカ軍側の損害は非常に少
なく、戦果は多大なものであった。

五 おわりに

一九四五年（昭和二〇）七月五日付の朝日新聞（大阪本社版）
の一面の見出しに、「B 29 二百五十、五群で侵入、姫路、高
松、徳島、高知を焼、爆撃」とある。連日の空襲のせいか、
あまり大きく取り上げてはいない。また、同じ日の神戸新聞
の一面には、「B 29 中小都市を頻襲、二百五十波状侵入、姫
路を夜間焼爆撃、高松、徳島、高知にも」、「二面には、「白鷲
魂不滅の挑戦、覚悟の空襲だ、来れ！ いざお次はいつぞ」

等勇ましい見出しがならんでいる。

中部軍管区司令部（陸軍）大阪警備府（海軍）は、四日午前
一〇時、次のように発表した。

一、南方基地の敵B29約二百五十機は七月三日深夜より
四日未明にかけて五群に分れて管区内数地域に波状侵入
せり。

二、敵の攻撃をうけたる地区次の通り。若狭湾および大
阪湾、山口西部沿岸に機雷投下。姫路、高松、徳島、高
知各市に焼夷弾並に爆弾投下。

三、損害および戦果は調査中。

四、敵は今後なほ中小都市の攻撃を続行すべきことを以
て被害減少に關し予め準備を必要とす。

B29二五〇機とは、アメリカ軍側の数字とは余りにも差が
ありすぎる。實際は機雷投下作戦に従事したのを省いても、
爆撃機数四七六機であった。日本の大本營の発表の常として、
来襲機数を過少に発表したのである。「被害減少に關し予め
準備を必要とす」とはおよそ空襲の実態を無視した談話であ
った。この日から約一か月半、同じような空襲が各地を襲い、
日本全土を焦土と化していった。

以上で、一九四五年七月三日深夜から四日未明にかけての
姫路空襲についてのアメリカ軍の戦術作戦任務報告の紹介を
終えることとする。この戦術作戦任務報告はアメリカ軍の資

料の一部であり、姫路空襲の実態を把握するためには、なお
一層日米双方の公式資料の解明、新聞記事の収集、体験の聞
きとり等が必要である。今後各方面からの御指導、御教示を
お願いする次第である。

注

① 『米国防略爆撃調査団報告書』の№66「B29部隊の対日戦略撃撃
作戦」（一九四七年刊）、『東京大空襲・戦災誌』第三卷（東京大
空襲を記録する会、一九七三年刊）に訳載、八七三ページ

② 同前、八七五ページ

③ 第二〇航空軍（B29部隊）『日本本土爆撃詳報』（地域別）、『東京
大空襲戦災誌』によれば、破壊地域は、一・四八平方マイル、全
市に対する破壊の割合は七一・七パーセント、計画に対する割合
は二一パーセントとしている。

④ 兵庫県土木部計画課、『復興誌』一九五〇年、六ページ